

A Study on the History of Rugby Football (V)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23365

ラグビーの歴史について(5)

秦 修 司

A Study on the History of Rugby Football (V)

Shuji HATA

緒言

THE BADMINTON MAGAZINE の vol. 14 (1902年) から vol. 16 (1903年) において、イングランドの当時の各種スポーツの状況が MASTERS OF THEIR ARTS のタイトルで詳細に記述されているが、それは次の項目から構成されている。

MASTERS OF THEIR ARTS

- I. THE MOTOR-CAR QUESTION
- II. SECONDARY EDUCATION IN GOLF
- III. ROWING
- IV. FISHING
- V. ON CAPTAINCY
- VI. OWNING RACE-HORSES, AND HOW TO SET ABOUT IT.
- VII. POLO
- VIII. SHOOTING
- IX. ASSOCIATION FOOTBALL
- X. RUGBY FOOTBALL
- XI. BILLIARDS
- XII. FALCONRY
- XIII. SKATING
- XIV. HUNTING FROM A WOMAN'S POINT OF VIEW
- XV. STEEPLECHASING
- XVI. LAWN TENNIS

Rugby Football の論説は 1902 年に発行された The Badminton Magazine, vol. 15 の 355 頁から 367 頁に F.H.B. CHAMPAIN と E.G.N. NORTH が寄稿している。そこでは、1900 年代初期、当時のイングランドにおけるラグビーフットボー

ルの状況が詳細に記述されている。

本研究では Champain と North による論説について、

HINTS TO YOUNG PLAYERS

- I. PASSING
- II. TACKLING
- III. THE THREE-QUARTERS
 - (i) In Attack
 - (ii) In Defence
- IV. HALF-BACKS
 - (i) In Attack
 - (ii) Defending Play
- V. FORWARDS
 - (i) Following Up
 - (ii) Loose Play
 - (iii) Hand Passing
 - (iv) Out of Play
 - (v) Scrummage Work
 - (vi) In Attack
 - (vii) In Defence
- VI. FULL-BACK

の順で叙述していく。

本論

執筆者である F.H.B. CHAMPAIN と E.G.N. NORTH はラグビーフットボールの発展を際立たせてきた変化の明確な概念を得るために、その起源をウェールズに持つスリー・クォーターを 4 人にするシステムがイングランド、スコットランドそしてアイルランドにおいて普及し始めた 1880 年代の終りと 1890 年代初期のラグビー

フットボールについて考察してみる必要があるとしている¹⁾。

スリー・クォーターを3人から4人にするシステムの変化はラグビーのゲームに変革をもたらしたが、その変革はその起源の地であるウェールズにおいては急激で極めて効果的であった。しかし、ウェールズのスリー・クォーターを4人にするシステムを導入したイングランド、スコットランドそしてアイルランドの国々では、変革が遅く、それによって生じた結果は一様でなかった。というのは、メジャーな変化、つまりスリー・クォーターを3人から4人のシステムにしたことによってマイナーな変化が数多く生じたのであるが、ウェールズにおいてはマイナーな変化のほとんどは同時に生起したが、イングランド、スコットランドそしてアイルランドにおいては、それらは極めてゆっくりと生起したからである。従って、スリー・クォーターを3人から4人にした大きな変革がフォワードそしてハーフ・バックのプレーに及ぼした影響について、特にイングランドのフットボールが首尾よい形態になるのに、何故、極めて長い時間を要したか、又、ラグビーフットボールの永久的な特徴を形成するその展望について考察するのは関心のあることである。

ある国のフットボールをインターナショナルの試合から正確に判断するのは不可能である。それは、国を代表するチームには首尾よいゲームをプレーするのに必要不可欠な統一性を形成する機会がほとんどないという事実とこれらの試合においてプレーヤーに影響する興奮や不安がこれらの競技をその国のフットボールの真の水準に関する基準にしないからである。これには、もちろん例外があった。というのは、1900-1901年のスコットランドのチーム²⁾、そして1892-1893年³⁾、そして1899-1900年のウェールズのチームによってプレーされたフットボール程、素晴らしいのはほとんどなかったからである⁴⁾。しかし、これらは例外であり、スリー・クォーターを3人から4人のシステムにしたことによって生じた効果をすべて見出すには、一流のクラブのフットボールに頼るのが適切であ

ろう。

ここでは、ラグビーフットボールがその最高頂に達した状態にあるウェールズ一流のクラブについてのみ言及する。Blackheath⁵⁾を代表するイングランドでは無敵のチームがウェールズのCardiff⁶⁾やNewport⁷⁾のクラブ・チームに何度も敗北を喫してきた。イングランドのGloucester⁸⁾、Bristol⁹⁾などのチームが、ウェールズのチームと対戦して成功を収めたのは1900年代に入った1年又は2年だけである。

この点について考察し、そしてウェールズのクラブのフットボールがイングランドより成功を収めた理由を求めるのが適切であるかもしれない。その理由について次のことが考えられる。先ず第1に、ウェールズはイングランド、アイルランド又はスコットランドより、プレーにヘッドワークを持込んでいることである。ウェールズはスリー・クォーターを3人から4人にした新しいゲームの世界最高の典型であると看做されているArthur Gould¹⁰⁾のようなプレーヤーから学ばなければならなかった教訓、そしてウェールズがスコットランド、アイルランド、そしてイングランドから学ばなければならなかったフォワード・ワークやタックルについての教訓を素早く習得し、ウェールズのゲームに導入した。イングランドにおいては古い伝統がほとんど廃れることがなかったので、重量のあるフォワード主体のゲームが長期に及んで維持され、スリー・クォーターを4人にしたパス主体のゲームが、習得するのが極めて難しいものとなった。強調すべき第2の理由はウェールズはイングランドのクラブより、ゲームの実践により多大の時間を費やしたことである。

スリー・クォーターを4名にするシステムの導入による利点や改善がたとえどんなものであるにせよスクラムのパッキングを容易にする効果がなかった。4人のスリー・クォーターの導入に伴う9人のフォワードから8人のフォワードへの変化は、最高のチームにおいてさえ、極めて奇妙に見えるフォーメーションをもたらした。スクラムを押す目的のための効果的な楔として、フォワードを8人にするることによっ

て、フォワードを9又は6人にする場合と同様にスクラム・ワークにおいて均衡の取れたものにし、従って効果的にするのは極めて難しかった。8人はスクラムの形成に適切な数でないという感情がどれ程、ラグビーフットボールのプレーヤーに持たれていたのか確かでないので、スクラムのパッキングでの変化を予測するのは不可能である。しかし、極めて大胆に言うのであれば、フォワードがスクラムを形成するのに9人が必要不可欠の数であるとすれば、それは1チームが15人でなく16人のプレーヤーから構成されることを意味する。というのは、スリー・クォーターを4人にするシステムが、ラグビーのゲームに必須になったのは確実であるからである。長い間、専門家によってフォワードを9人にするシステムが最上であると看做されてきた。9人のフォワードが相手8人のフォワードを圧倒すれば、相手チームに1人余分のスリー・クォーターがいたとしてもそれはほとんど問題でなく、そして現実に9人のフォワードがゲーム全体を通して相手8人のフォワードを完全に圧倒してしまうのが可能であれば、フォワードを9人にするシステムが最上であるとする考えに誤りを見つけないことができない。しかしスクラムでの数的優位性が圧倒的なものでない場合、8人のフォワードがスクラムから素早くボールをヒール・アウトして、すみやかにスリー・クォーターにボールを渡すことができれば、その場合、ボールはパスと攻撃の技術に熟練した5人のスリー・クォーターの掌中に入るが——というのは4人のスリー・クォーターのシステムではハーフの1人がスリー・クォーターにボールをフィードする攻撃の際の5人に相当したからである——その時、スクラムでの数的優位性が不十分になったのである。

ウェールズにおける新しいゲームの先駆者はその問題について入念に検討し、その新しい競技様式によって発展したフォワードはボールをスクラムから素早くヒール・アウトするフォワードであった。イングランドの権威者はフォワードについて極めて入念に考察した後、スリー・クォーターを3人から4人にするのが賢

明であるとし、この手直しとともにフォワードの戦術の修正がなされた。

スリー・クォーターを3人から4人のシステムにしたことによって生じたフォワード・プレーの注目すべき最初の変化は、ゲームを加速化するために考案されたヒーリングの戦術の導入であった。ヒーリングの戦術がゲームのペースに極めて影響を及ぼした。かつてのスクラムは壮大であったが、8人での短時間で素早いスクラムには何か爽快なものがあつた。激しい押しが効果的なスクラムの重要部でなければならないが、それはかつてのように長時間持続するものではない。もう1つの極めて興味深い変化はフォワードによって導入された防御の主要な方法としてのスクラムを回転させること、つまりホール技術の開発であった。

スリー・クォーターを4人にするシステムの導入によるバックスのゲームの加速化はフォワードのプレーのゲームの加速化にもつながった。というのは、スクラムのホール技術はスクラムを回転させた瞬間にスクラムが解かれなければならないほど効果がなかったからである。素早いヒーリング、手際のいいホール、スクラムを回転さす変り目でブレイク・アップする手際よさが1900年代初期の素晴らしいフォワードの特徴であった。又、それらだけでなく、ボール・ハンドリングと素早いパス、そしてボールがルースの状態にある時、扇形に広がる際の素早さが有能なフォワードの特徴であった。瞬時にチーム全体をスリー・クォーター・ラインに変換するのが1900年代初期の特徴であったとされているが、1892年の有名なイングランドのチーム¹⁹が1月2日、Blackheathにおけるウェールズとの試合において、時々10又は11人の異ったプレーヤーがボールをGouldのようにワン・モーションでボールをハンドリングするように、卓越したパスに専念していた。しかし、フォワードすべてのプレーヤーがスリー・クォーターの役割をみずから受持つこのプレーの形態は全く目新しいという訳でなく、ウェールズのフットボールにおいてはそれは近代のゲームの誕生からたどって行くことができるが、まだそ

の価値が1900年代初期にフットボールのプレーヤーに急に評価がなされてきた特徴であったのは確かである。1900-1901年のシーズン、トリプル・クラウンを獲得したスコットランドのチームは、その成功の多くを、フォワードすべてのプレーヤーがルースでパスを受けパスをした方法、そしてスクラムを形成したプレーヤーが防御の目的でバックからブレイク・アップしてタックルするために拡散していく素早さに負っていたのは確かである。というのは、古いラグビーの競技様式に極めて不足していたフォワードとスリー・クォーター間のこの相互の理解があったので、フォワードがパスにおいて予測するのが許されればフォワードは又、相手ハーフがスリー・クォーターのためにプレーを効果的に加速した瞬間にフィールドに素早く拡がっていくことによって防御でスリー・クォーターを支援しなければならない。

1880年から1990年におけるゲームの発達の結果として新しい型のフォワードが識別されるならば、ハーフ・バックも又、部分的に変節しなければならなかった。ハーフ・バックはかつてのように俊足でなければならず、スリー・クォーターより素早いハンドリングが要求される。攻撃においては味方フォワードにボールをコントロールさせてヒーリングさせなければならず、又、ハーフ・バックは孤独であった。というのは、その時パートナーであるもう1人のハーフ・バックはドロップ・バックしておいて味方スリー・クォーターと接触を保ち、スクラムからボールが出て来る瞬間を待機しているハーフ・バックの周辺を徘徊している相手の2人のハーフ・バックと対峙していたからである。ボールがスクラムに投入される瞬間は長くなく、ボールがスクラムから手際よく出て首尾よくスイング・アウトされワン・モーションでドロップ・バックしているハーフ・バックに素早く渡り、そのパスが速いものであればある程ハーフ・バックが突破する機会も大きくなった。スクラムを形成しているプレーヤーのかかとかからのボールのスイング・アウトは極めて新しい様式の典型であり、ゲームでの他のことと極め

て異っており、ワン・モーションだけであるが、しかしスリー・クォーターの成否はその動作にかかっていた。10分の1秒のためらいでもあれば、その機会は失われてしまうからである。ハーフ・バックはバックスの攻撃の戦術の成功を決定する枢軸になってきた。

ハーフ・バックスは、味方フォワードがスクラムでボールを相手に獲得された場合、相手スリー・クォーターにボールがスイング・アウトされないようにするために、オフ・サイドの戦術を採ることによってゲームに対する規則違反をしがちであった。イングランドの西部において、レフリーのこの問題に関しての寛大さから観客とプレーヤー両者の観点からゲームがスポイルされて来た。彼等がハーフ・バックスのプレーで常にオフ・サイドの反則を犯すために、断固としてオフ・サイドの反則を犯し続けることはゲームを混乱させたが、混乱はフットボール場でのその極めて楽しい特徴がないものであった。ボールを走り越して正しい側に戻る試みを少しもせずボールが出る前に相手ハーフの周りで徘徊している防御のハーフ・バックについて言及しているのはもちろんである。イングランドの1902年1月11日、Blackheathでのウェールズとの試合での敗北¹²⁾は実際に有能なレフリーを持ったにもかかわらず、そのような方法の愚かさを明確に感じさせている。

近代のフル・バックに関して、フル・バックのタックルのパワーよりキック・ボールを処理する能力が考慮されることが認められてきたし、新しいプレーの様式がこの原因であると考えられる。

スリー・クォーターを4人にするという新しいシステムでのプレーの傾向はそれによってプレーのコンビネーションの価値は高まったが、一方、真に偉大な個々のプレーヤーを産出する可能性がなくなったことが注目される。

HINTS TO YOUNG PLAYERS

すべての若いプレーヤーに与えられる2つの一般的な助言は、彼等のフィールド上でのポジションに関係なく、‘Play hard’と‘Play

with your heads' である。イングランドの1901年3月9日、BlackheathのRectory Fieldでのスコットランドとの試合での敗因¹³⁾は、スコットランドのスリー・クォーターの卓越した能力発揮とは別に、防御のプレーにおける弱体と決断力の欠如であった。スコットランドがイングランドをタックルした時はイングランドを地面に転倒させたが、イングランドはただ相手を触るだけのことがしばしばあった。乱暴は避けるべきことである。元気一杯は全く別のことであり、それがいくらあっても多過ぎるということはない。イングランドが1900年1月6日、GloucesterのKingsholmでのウェールズとの試合で敗北したのは¹⁴⁾、ウェールズが彼等のやり方を変え、そして相手を困惑させた巧みな方法以上のことであった。——ウェールズのハーフ・バックスは頭脳を使ってプレーしたが、イングランドのハーフ・バックスはロボットのようにプレーした。

I. PASSING

理に適ったコンビネーションが成功のキー・ストーンである。個人のプレーが如何に卓越していようと、長い目で見れば、すべてのプレーヤーが互いに利益を求めているコンバインドされた並のプレーヤーのチームを打破することは望めない。従って、固執すべき第1のポイントはパスを受けてパスをする際の正確性であるが、それには入念な練習が要求される。パスは目的を達成するための手段であり、パス自体が目的でない。ただ単にボールをもう1人のプレーヤーに手放すだけではそれ自体推奨すべき行為でない。パスすることによって他のプレーヤーがトライを得るか地域を獲得することができた時に推奨されるに足る行為になる。パスを受けるプレーヤーはボールを持っているプレーヤーの後方にとどまっておかなければならない。このパスの原則の重要性は極めて明確なので、それは自明の理のように聞こえるが、イングランドのフィフティーンにおいてさえその原則が何度も違反された。パスは強くて低いものであるべきである。山なりのパスは無用と

言うよりは有害で、ゆっくりとした高いパスは災難をもたらし成功を不可能にする。ボールを持っているプレーヤーはボールを片腕の下にかかえ込んでしまうのでなく両手で持ち運ぶべきである。それによって正確に狙いを定め強いパスを送るのが容易になり、相手に意図を察せられることなく、意のままに右又は左にパスを送ることが可能となる。パスする前に必ず少なくとも相手の1人を引きつけ、味方から引き離すべきである。パスをする心理的な瞬間はタックルを受ける直前であるが、パスが遅過ぎるよりも早過ぎの方がベターであり、そして如何なる状況にあっても相手に手をかけられるまでパスを受けるのを待つべきでない。というのは、これによってパスが不安定で不正確になる傾向にあり、又、バックキング・アップして再びパスを受ける態勢をとる妨げになるからである。

II. TACKLING

タックルは常に低く激しく行くべきである。相手プレーヤーのどこを目標にして行くのが最適であるかの見解は様々であったが、膝のすぐ下というのもあり、膝のすぐ上というのもあった。いずれにせよ、膝又はその周辺が狙って行くべき安全な位置である。相手を確実に地面に転倒させるのが重要である。中途半端なタックルは無用である。相手を待たずできるだけ激しく相手に身体を投げかけることが重要である。相手の脚にとび込めば、地域をカバーすることが可能で、その推進力によってほとんど必然的に相手は地面に転倒する。タックルに行く際、相手の顔を見るのは避けねばならない。相手の顔を見ることによって、相手のフェイント又はドッジングでタックルをはずされる可能性が極めて高くなるからである。タックルに行く最上の方法は、タックルして握り締める位置から目を離さず他の何も見ないことである。

III. THE THREE-QUARTERS

(i) In Attack

スリー・クォーターは、攻撃ではスクラムからボールが出た瞬間、全員が同時に走り出し、

走るスピードを少しも落とす必要なく互いに順々にパスする位置にあることが可能な互に対角線上にあるような——6～8ヤードの間隔が安全である——位置に立つべきである。スリー・クォーター、特にセンターのプレーヤーは相手ゴールに向かってグラウンドをできるだけ真すぐに走るべきである。走りながら相手を交してグラウンドを斜めに30ヤード走るのは華麗で効果的に見えるがそれは全く効果がなく、現実には地域を失うことがしばしばある。このような攻撃であればスリー・クォーターが少なくとも1人は必要でなくなる。というのは、せいぜい味方ウィングがタッチ・ラインに押しやられるだけで、実際にはアウト・オブ・プレーになる。センターのプレーヤーは一般的に一番近いウィングにパスすべきであるが、もう1人のセンターにパスして戻すのが効果的であることがしばしばあり、又、遠い方のウィングにグラウンドを斜めにパスするのも効果的である。型に嵌まるのは決して効果的でない。絶えず同じ策略を繰返し行えば、如何なる並のチームによっても阻止されるのは確実である。イングランドにおいてあまりにも試みられていない攻撃法で、もう1つの極めて効果的な攻撃法はバント・キックを高くあげて、グラウンドを真すぐか斜めに走ってフォロー・アップすることである。この攻撃は、その攻撃によってめったに又は決して得点をあげることもない防御側を必ず当惑させるが、一方、それによってボールはルースの状態になって味方チームに得点の機会が得られる。‘irregular tactics’ と称せられるかもしれないものが成功するには練習が要されるのはもちろんのことである。

(ii) In Defence

スリー・クォーターは、防御ではできるだけボールと平行に保っておくべきである。攻撃ではかなり下って位置をとることができるが、防御ではオフ・サイドにならない所まで充分上って位置をとることができる。スリー・クォーター・ラインの各々のメンバーは自分自身の相手をマークしてボールがスクラムから出て攻撃が始まるとすぐに相手めがけて真すぐに行き、

その相手にボールが渡ったらタックルで倒さなければならない。他のプレーヤーのことは決して考えず、自分自身の相手（対面）を動かさないようにしなければならない。それによって自分の役割を果たしたことになる。スリー・クォーターには敏捷性と精力が必要不可欠である。対面を首尾よく処理した瞬間、対面がボールをパスしようとしたら、対面から離れてもう1人の相手に行かなければならない。プレーヤーとボールを同時にタックルするのを理想とすべきである。防御において、その機会がある時にはいつでもキックを用いなければならない。その場合、タッチになる20ヤードのキックは相手の掌中に入る40ヤードのキックより価値があることを念頭に入れておくべきである。

IV. HALF-BACKS

(i) In Attack

ハーフ・バックスがゲーム全体の枢軸を形成する。攻撃の開始、相手を制圧する攻撃的な戦術の機会他プレーヤー以上にハーフ・バックスにある。攻撃においては、通例の方法はたいていの場合、1人のハーフがスクラムを受持ち、もう1人のハーフはスクラムのほとんど真後4～6ヤード離れて位置する。スクラムを受持つハーフは味方フォワードの足元まで充分上っておくべきで、スクラムからボールが出て来た瞬間に下っているもう1人のハーフにワン・モーションでパスをする。成功の秘訣は先ずボールを拾い、そしてワン・モーションでパスをするといった結合された動作にある。

ハーフは最初のパスをしたら、ハーフの次にゲームの展開に応じて動かなければならないのは当然である。ハーフのプレーを型に嵌めるべきでない。スクラムを受持つハーフは必要に応じて自ら突破をはかるか、グラウンドを横切ってウィングにパスしてよい。又は、タッチ近くでスクラムが形成されている場合はブラインド側のスリー・クォーターにパスしてもよい。攻撃法の変更についてはスリー・クォーターの場合のようにハーフは互いに熟知しておき油断しないしておくことである。ハーフ・バックスはす

べてどちらの側にも同じ正確性をもってパスすることができなければならないが、これはほとんどのプレーヤーに自然に備わる天賦の才ではない。

(ii) Defending Play

ハーフ・ボックスは、防御においては苛酷な仕事と不快な仕事の両方を覚悟しておかなければならない。スクラムで相手がボールを獲得したら、スクラム後方にあるボールとほとんど平行に保っておくべきで、そしてスクラムからボールが出た瞬間に両ハーフともスクラムを支持している相手ハーフを潰しに行くべきである。これによって理論上、相手のもう1人のハーフをボックスによる以外はマークすることができないが、実際的には、ボールがウィングに達するまでには——ボールがウィングに達した場合——両ハーフとも充分間にあって対処することができる。

フォワードによる攻撃が相手に打破された場合、ハーフ・ボックスは地面に身を挺してボールを獲得する覚悟が必要である。ハーフが足でボールを獲得したり手でボールを拾いあげる試みは、ハーフの役割を充分知っている相手フォワードに対しては成功の見込みが全くない。唯一の方法は身を挺してボールを獲得することであるが、これには胆力が要求され、その際にはハーフは、注意してフォワードの足元から頭を曲げて離しておくべきである。事実、できるだけ身体を半円形にすることである。もちろん、フォワードがボールを激しく蹴ったならばハーフはボールを拾いあげてタッチ・ヘパント・キックすることができる。

V. FORWARDS

有能なフォワードのプレーヤーであるには、攻撃又は防御においてどちらかのチームがトライをあげるまでフォワードの仕事は成し遂げられないことを常に念頭に入れておかなければならない。フォワードは常に動きまわっていなければならない。味方が相手にプレッシャーを受けていたら、絶えずダッシュで戻り、タックル

又はセービングで役に立たなければならない。

(i) Following Up

フォワードは常にできるだけ一生懸命にボールをフォローすべきである。8人のフォワードが相手ボックスにできるだけ激しく向って勢いよく進んでいけば、相手ボックスを混乱させ、相手ボックスのプレーヤーのキックを無効にし易い。相手チームがバント・キックで攻撃してきた場合、フォワードはボールが落下する地点に全員が行くべきでなく、グラウンドを扇のように拡がって突進し、さらには相手のスペースを制限しなければならない。

(ii) Loose Play

ボールがルースの状態になった場合、フォワードは少なくとも2つのラインを採るべきである。第1の分団がボールを走り越してしまった場合、ボールについては第2番目の分団が責任を持ち本来の最初のラインはその後方をフォロー・アップする。フォワード個々人でのドリブル攻撃が危険であることはめったにないが、8人のフォワードがボールを足元に保持してドリブルで攻撃するのはどんな防御にも相当の負担をかけるものである。

(iii) Hand Passing

もう1つの極めて効果的な形のフォワードの攻撃は、短くて素早い手渡しのパス攻撃である。これをなすにはフォワードは1ヤードか2ヤード、あまり彼等の間に間隔をあけず、ほとんど平行にしておき、ボールを素早くプレーヤーの手に渡すべきである。いったん、この手渡しパスの攻撃が進行している場合、それを阻止するのはほとんど不可能である。

(iv) Out of Touch

タッチでの整列はその位置による。自陣ゴール・ライン近く——10～20ヤードの位置——であれば、一般的には5ヤード・スクラムにしてボールをスロー・アウトしないのが賢明である。整列において散在すればする程、突破していく機会も大になり、悪くてもタッチ・ライン上よりはグラウンドの中央でタックルされるのが適切である。タックルされたらすみやかにボールを地面に置くのが賢明である。奮闘するのは全

く役に立たない。英雄的な尽力により2ヤードは前進するかもしれないが、それまでに相手のプレーヤーに囲まれてしまう。タックルされたらボールをすみやかに置きドリブルを開始することによって有効な攻撃を行う確実な機会が生ずる。相手側のスローであれば、1人のプレーヤーをぴったりとマークしそのプレーヤーを確実にタックルしなければならない。

(v) Scrummage Work

スクラムを形成する場合、フォワードは3列で、つまり、3-3-2の8人で形成すべきである。スクラムにおけるフォワードの第1の目的はボールを獲得して、ボールをファースト・ローとセカンド・ローの間の足元に持つていくことである。これが必要不可欠なことであり、従ってフロント・ローはボールがスクラムに投入された瞬間、足でボールを手際よくフッキングする態勢をとっておかなければならない。ボールを獲得した後、そのボールをどう活かすかは、チームが攻撃か防御かによる。

(vi) In Attack

攻撃において、フォワードは味方バックスが得点するのを期待し、そう称される 'heeling out' によって、この目的を達成する。ヒール・アウトする最上の方法はスクラムをタイトに保ち、できるだけ力強く真すぐに押すことである。常にファースト・ジャブを試み、ボールがスクラムに投入された瞬間にあらゆる力を発揮する態勢をとっておかなければならない。その考え方は、相手を押し込んでボールから遠ざけ前進してボールを後方に残すことであった。これが不可能であれば、ボールを後方、脚の間に蹴らなければならない。この際、多大の判断が要求される。ボールを蹴るのが強過ぎれば、ボールが直接ハーフ・バックスの手まで行ってしまう。ボールがスクラムから出るのがゆっくりと穏やかであり過ぎれば、相手ハーフ・バックスが上ってきて、味方ハーフは徹底的にプレッシャーを受ける。中庸を得るのは練習のみである。2つのポイントに固執しなければならない。先ず第1にボールをスクラムから出すまでは決して押すのを止めてはならない。第2は

ボールはスクラムの横側からでなく後方に出さなければならない。相手に押し込まれておれば、すぐにヒールするという考えはすべて断念しなければならない。

(vii) In Defence

フォワードがスクラムにおいて同じ程度に熟練して重量ある相手フォワードを真すぐ押しても、せいぜい地域を2〜3ヤードしか獲得できないが、それは限らない尽力の消費によってしかなされない。スクラムを回転させるのは容易ではないが、相手フォワードからのプレッシャーを効果的に回避する唯一の方法である。フォワードの前列は互いに姿勢をタイトに保っておき、ボールを獲得した瞬間に急に半回転してタッチ・ラインから離れるべきである。これには相手スクラム全体を瞬時に回転させる効果があった。バック・ローのプレーヤーの2人は、この半回転に加わらず、極めてルースに保持しておき、できるだけ素早くブレイクできるようにして真すぐ前方に押すべきである。

VI. THE FULL-BACK

フル・バックの役割についてはあまりにも明白であり、それについてあまり記述する必要がない。タックルについては、タックルの項で記述されたことが他のどのプレーヤーよりもフル・バックにあてはまる。キックについては、どちらの足でも、確実にタッチにしなければならない。

結

本研究では、1902年に発行されたThe Badminton Magazine (vol. 15)に掲載されたMaster of their artsにおけるChampionとNorth論説のRugby Footballをとりあげ、1900年代初期、当時のイングランドにおけるラグビーフットボールの状況について叙述した。その起源をウェールズにもつスリー・クォーターを3人から4人にしたシステムが1880年代終りから1900年代初めにイングランド、スコットランド、そしてアイルランドに普及し始めた。スリー・クォーターを3人から4人にするという大きな

変革によってフォワードのプレーが加速化され、それによってスクラムでのヒール・アウトやホールの戦術が開発され発展していった。又、ハーフ・バックス、スリー・クォーターのプレーに多大の影響を及ぼし、プレーの加速化につながった。

注及び引用・参考文献

- 1) イングランド、スコットランド、アイルランドは1894年にスリー・クォーターを4人にするシステムを採用した。
- 2) スコットランドは1900-1901年のシーズン、トリプル・クラウンを獲得した。Scot. (18) vs Wales (8), Scot. (9) vs Ireland (5), Scot. (18) vs Eng. (3)。
- 3) ウェールズは1893-93年のシーズン、トリプル・クラウンを獲得した。Wales (12) vs Eng. (11), Wales (9) vs Scot. (0), Wales (3) vs Ire. (0)。
- 4) ウェールズは1899-1900年のシーズン、トリプル・クラウンを獲得した。Wales (13) vs Eng. (3), Wales (12) vs Scot. (3), Wales (3) vs Ire. (0)。
- 5) Blackheath F.C.。世界最古のラグビーのクラブで、1858年に設立。
- 6) Cardiff R.F.C.。世界のラグビーのクラブの中で最も有名なうちの1つで、ウェールズのクラブ。1876年に設立。
- 7) Newport R.F.C.。ウェールズ最強でパワーフルなクラブの1つ。1874年に設立。
- 8) Gloucester R.F.C.。イングランドのクラブチームでWest Countryのラグビーで重要な役割を果たしてきた。1873年設立。
- 9) Bristol R.F.C.。イングランド、West Countryの最強のクラブの1つ。1888年に設立。
- 10) Arthur Gould。Newport R.F.C.に所属。1885年-1897年、ウェールズ代表、27キャップ。彼の時代、ウェールズが1893年に初めてトリプル・クラウンを獲得し、ウェールズのゲームに多大の影響を与えた。
- 11) イングランド1891-1892年のシーズン、トリプル・クラウンを獲得した。Eng. (17) vs Wales (0), Eng. (7) vs Ire (0), Eng. (5) vs Scot. (0)。
- 12) イングランドは1902年1月11日、Blackheathでの対ウェールズ戦において8対9と1点差で敗れたのだが、イングランドのOughtredは自陣ゴール・ポスト近くでのスクラムでオフ・サイド・タックルの反則を犯し、それによりウェールズはペナルティ・ゴールをあげ、1点差で勝った。
- 13) イングランドは1901年3月9日、BlackheathのRectory Fieldでの対スコットランド戦で3対18で敗れた。
- 14) イングランドは1900年1月6日、GloucesterのKingsholmでの対ウェールズ戦で3対13で敗れた。